

総合美学へ向けて¹⁾

利 光 功
基礎教育課程

Toward Synthetic Aesthetics

TOSHIMITSU Isao

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 12, 2001 ; Accepted January 18, 2002)

最初に本発表での私の主張を、一種の命題として提示したい。すなわちそれは「新しい21世紀の美学は、分析ではなくて総合の方法をとる方向へ向かわなければならない」というものである。以下の4節は、この命題の概略の、ないしは断章的な説明である。

第1節

第2次世界大戦後の英米系の美学では、美学は批評の哲学 (H. オズボーン)²⁾ とかメタ批評 (M. C. ビアズレイ)³⁾ であるとする考えが一般的となった。当時、分析哲学の影響の下に、美学もまた分析的方法を用いるようになり、芸術批評の主要な概念、特に芸術の概念の分析を試みた。これらは分析美学 (analytic aesthetics) と呼ばれるようになったが、概念の意味とその使用を明確にした点で、分析美学の功績は認めよう。しかし分析美学が、現実の美や芸術の現象に直接目を向けず、些細な言語的問題にのみかかわりあって、私どもの美学を矮小化して、つまらない学問にしてしまった点は批判されなければならない。ひとつ例を上げれば、ウェイツの有名な、しかし奇妙な表題の論文「美学における理論の役割」である⁴⁾。奇妙なというのは、このタイトルからすれば美学に理論でないようなものがあるわけだが、それが何か示されていないからである。それはともかくこの論文でウェイツは芸術における優秀さの規準、あるいは芸術における優秀さの理由をめぐる論争にかかわる理論のみが意義があるとして、美学をそのような限られた理論に限定してしまっており、これは美学の矮小化以外のなにものでもない⁵⁾。

第2節

分析的方法といえば、遑って美学の実質的な創立者とされるドイツの哲学者カントは、美的判断力の分析

(Analytik der ästhetischen Urteilskraft) を行った⁶⁾。一層、具体的にいえば趣味判断の分析である。ここで趣味 (Geschmack) と呼ばれているものは、美を判定する能力である。ところがカントは美的判断力を二つに分ける。ひとつは快適なものについての判断であり、もうひとつは美についての判断である。カントは前者を感官趣味 (Sinnengeschmack)、後者を反省趣味 (Reflexionsgeschmack) と呼んで趣味を二つに区別するのである。これはとりもなおさず私どもが、快適なものについての判定能力と、美についての判定能力をもっていることを意味する。そしてさらにカントはこの判定能力の行使に関して次のようにいう。美の判定においては快の感情に先行しない、もしもある対象について快の感情が先行するとすると、それは感官感覚における単なる快適なものになってしまう、と。この考えに従えば、判定能力が働くよりも前に、快の感情が先行するか否かで、対象が美か快適か決まってしまうのである。これは奇妙な議論であり、私は肯認できない。そもそも判定能力は元来ひとつであり、対象をその場その場でさまざまに判定するというのが本当のありかたであろう⁷⁾。

さらにカントは一般の趣味判断から純粹趣味判断を分ける。そして純粹趣味判断は刺激と感動、それに完全性の概念に依存しないと主張する。その結果、美を自由美 (freie Schönheit) と付属美 (anhängende Schönheit) に二分してしまうのである。

私どもは美学に対するカントの貢献、すなわち美の自律性と普遍的妥当性の理論を打ち立てたことを評価している。しかし他方でカントが美を純粹な自由美の狭い領域に閉じ込めてしまったことは否めない。美の判断に対象がいかなるものであるかの概念、それに対象の存在についての少しの関心も全く介入しないとする理論に私は同意できない。美的対象を判断するために、私どもは私

どももてるすべての能力を動員しているのではないか。すなわち私どもは感覚的感受性を基本にして、知覚力、想像力、思考力などを同時に働かせているのである。この力能は総合的であって、元来、分離できないものであろう。感性の働きは理性の働きと結び付いていて、決して個々別々に孤立して働いているわけではない。私どもは自己の全能力をもって、対象と対峙しているのである。

分析という方法は学問の一方法として重要であり、これを軽視するつもりはない。しかしこの方法による限り、考察の対象は限りなく分断され、細分化されることになる。ひいては学問自体も細分化されてくるのであって、その結果は対象の全体像を見失うことにもなりかねない。

第3節

そこで私どもはさらに遡って美学という学問の命名者であり、創立者である A. G. バウムガルテンに美学がいかなる学問なのか聞いてみなければならない。バウムガルテンは『美学 (Aesthetica)』の冒頭で、「美学は感性的認識の学である」と規定していた⁸⁾。かれの理論によれば、感性的認識は下位認識であり、下位認識能力によって認識される対象は感性的なものである。他方において本来の認識は上位認識と呼ばれ、上位認識能力によって認識される対象は知性的なものである。それはまた論理学 (Logica) の対象であって、そこから美学は論理学の妹とされている⁹⁾。論理学と美学が姉妹関係にあることに注目したい。

ともあれバウムガルテンの「上位能力で認識されるべき〔知性的なもの〕は論理学の対象であり、〔感性的なもの〕は美学の対象である」¹⁰⁾という言葉は、古代のピュタゴラス的プラトンの宇宙論 (cosmology) と学問体系を思い起こさせる。すなわちピュタゴラス・プラトンの考えにしたがえば、存在は二種類ある。ひとつは物質的な存在で、感覚によって把握される。もうひとつは不変で非物体的の真実在であって、思惟によってのみ把握される。存在の二つのありようにより、知も異なった二つの形態をとる。すなわち真実在、つまり思惟されるものについての学問である哲学的問答法 (διαλεκτική) と、物質的存在、つまり知覚されるもの (τό αἰσθητόν) についての学問である自然学 (φύσις) である¹¹⁾。

私どもはバウムガルテンの論理学は思惟されるものについての学問、すなわち哲学的問答法に対応し、美学は知覚されるものについての学問、すなわち自然学に対応すると考えることができよう。知覚されるものの世界は広大であって、自然に限定されない。3世紀末ごろ活躍したピュタゴラス派の哲学者イアンブリコスによれば、知覚されるものにかかわる学問として自然学のほかに倫

理学と政治学を上げている¹²⁾。その理由は明白であろう。倫理学は人間の行動に関する学問であり、政治学は人間集団の行動に関する学問である。そしてどのような行動や行為であっても、その善悪を判定するためにはまずもってそれが知覚されなければならないからである。私どもはさらに知覚されるものの世界に、人工物の世界、とりわけ芸術世界を加えなければならない。

こうしてみると感性的認識の学としての美学の研究対象は限りなく広大である。私はこの対象を美的感性的な現象一般と呼びたい。ヘーゲル以後、美学の主題は芸術に限定されてしまった感があるが、そのような限定から私どもは解放され自由でなければならない¹³⁾。

第4節

とはいうものの、私どもは美的感性的現象一般の一部しか把握できない。そして把握したものを叙述し、最終的に学問のかたちにしなければならない。この活動は私どもの思考力、ないしは思索の能力に依存している。かつてフランスの著名な美学者エチエンヌ・スリオは、美学は「反省的思考の一形式である (une forme de la pensée réflexive)」と述べたが¹⁴⁾、この反省的思考は同時に総合的思考でもなければならないと考える。たとい取り上げるテーマが美的感性的現象一般のなかの限られたものであっても、それを取り扱う私どもの立場は分析的ではなくて総合的でなければならない。ここにおいて「総合的 (synthetic)」の意味は二重である。すなわちひとつは思考の活動が、私どもの知覚力、想像力、判断力、理解力などのすべての能力を総合したものであるという意味においてである。もうひとつは思考の内容ないし材料に関わる。美的感性的現象について思考するためには、様々な分野の様々な知覚記憶と知識を総合しなければならない。部分を考察しながら全体を視野に入れているという意味で総合的なのである。それゆえ美学はもともと総合的な学問であるといえる。別な観点からいえば、美学は学際的な学問の性格を有しているといってもよい。

そうすると美学の学問としての自律性はどうなるかという疑問がもちあがるであろう。それに対して私はアカデミックな学問としての自律性よりも、総合的な学問であるところに美学の特色があると答えたい。

この点で参考となるのは、「芸術のための芸術 (l'art pour l'art)」の主張が、芸術の自律性を確保したのはよいとして、その反面で芸術を自己目的化した狭い領域に押し込めてしまったことである。また近代の美的価値のみを目的とした純粋芸術が、純粋性は確保したものの反面で芸術の包含する多様で曖昧な非合理的なものを捨象

してしまったことである。芸術の価値のコアをなすのは美的価値であるにせよ、子どもが引きつけられるのは様々な価値が混入しおり混ざった価値複合体としての芸術である。それに対して子どもの反省的総合的思考が、多角的な考察を行うのである。ともあれ美学という学問の地平は広大なのである。

最後に実際に美学をそのように捉えている最近の例を三つほどあげてみたい。まずヘンクマンとロッターの編集した『美学のレクシコン』(1992)である¹⁵⁾。この辞典の主な項目が芸術哲学や芸術の生産、表現、受容にかかわるものであることはいうまでもない。しかし編集者が考えている美学の領域は、子どもがこれまで考えていたそれよりも広い。まず美学に形容詞がつけられているもので、目新しい項目をあげると、生物学的美学、政治美学、ファシズム美学、間文化的美学、コスモロジー美学、医療美学、料理の美学、商品美学などがある。それにこれまでの美学辞典では通常挙げられていなかったような、たとえば余暇、美容術、大衆文化、文化政策、モード、スポーツ、サブカルチャー、検閲といった項目が立てられていることである。

第二にミカエル・ケリーが編集主幹として刊行した4巻本の『美学のエンサイクロペディア』(1998)である¹⁶⁾。この百科辞典の序文は、次のような一文で始まっている。「美学は多くのアカデミックな学問と文化の伝統が出会い集まる場として独特な位置を占めている」。私は若い編集主幹ケリーのこの言葉に全面的に賛同する。すなわちケリーは美学が芸術に関する哲学の一分野であるけれども、また美術史、文学理論、法律、社会学などの他の学問分野の一部でもあるとしているのである。ケリーの美学の定義は「芸術、文化、自然についての批判的反省」というものであるが、この批判的反省(critical reflection)に、さらに総合的という形容詞を加えるならばほぼあるべき21世紀の美学の方向を指し示すものになるであろう。実際この百科辞典の内容は驚くほど広範囲にわたっており、思想家ばかりでなく画家、文学者、音楽家、建築家など多彩な人名に加えて、camp、cyberspace、death and aesthetics、fashion、food、gay aesthtics、hypertext、rasa などこれまで美学辞典にみられないような項目も多い。これは主として米国の若手研究者からなる472人の執筆陣の多さ多様さからくるものであろう。

第三に、佐々木健一著『フランスを中心とする18世紀美学史の研究——ヴァトーからモーツァルトへ』(1999)である¹⁷⁾。普通に18世紀美学史の研究といえば、子どもは美学の学説の歴史研究を思い浮かべる。しかしこの著作はそうではない。もちろんデュボスやディドロの言説が紹介され解釈されていないわけではない。佐々

木はこの書の序論で「美学史研究の課題は、それぞれの時代において人びとが美や芸術をどのようなものとして理解し、体験していたか、というその実相を再構成することである」¹⁸⁾といい、これを「美的体験の様式史」とよぶ。たしかにここで問題にされているのは「美学史」という歴史学的な概念であろう。しかし歴史学の一分野としての美学史であっても、ここで「美学」という学問が極めて広く捉えられていることは、副題の「ヴァトーからモーツァルトへ」によく窺えるのである。それはほとんど美的体験に等しいといってもよい。そういえばわが国には「武士の美学」とか「男の美学」という言い回しがあった。ここで「美学」がエゴないし私情を捨てたいさぎよい生き方をいうことはいうまでもないだろう。

註

- 1) 本稿は、2001年8月27日から31日まで開催された第15回国際美学会議の折りに、口頭発表した原稿の日本語版である。英語版の原稿は、“THE GREAT BOOK OF AESTHETICS”という表題でCD-ROM版によって刊行予定の報告書、“Proceedings of the XVth International Congress of Aesthetics, 2001, in Japan”を参照されたい。この国際美学会議の統一テーマは《21世紀の美学》であった。なお発表時間は質疑応答の時間を含めて30分であったため、英語版はこの日本語版の第4節の一部が省略されていること、また両版の間に表現上に若干の相違点があること、さらに日本語版には今回新たに註を付けたことを断っておく。
- 2) Harold Osborne, *Aesthetics and Criticism*, 1955. P. 1. “Our study will be limited to criticism which is written for and from the point of view of the consumer.” P. 2. “But he (aesthetician) does find it necessary to construct a ‘critical philosophy’ of criticism in order to demonstrate what things criticism can do and what things it cannot do;” なおオズボーンは英国の20世紀後半の代表的美学者である。
- 3) Monroe C. Beardsley, *Aesthetics*, 1958. P. 4. “Aesthetics can be thought of, then, as the philosophy of criticism or metacriticism.” ビアズレイは米国の20世紀後半の代表的美学者である。
- 4) Morris Weitz, *The Role of Theory in Aesthetics*, in: *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. XV, No.1., 1956.
- 5) 分析美学の問題点については、拙稿「美学はわびしいか——分析美学の射程と限界」『美学』45巻3号、1994年12月、を参照されたい。
- 6) Immanuel Kant, *Kritik der Urteilkraft*, 1790. Erster Abschnitt.
- 7) カントの感官趣味と反省趣味の二分については、拙稿「カントの趣味判断について」『芸術世界』東京工芸大学芸術学部紀要、第7号、2001年3月、を参照されたい。
- 8) A. G. Baumgarten, *Aesthetica*, 1750/1758. §1. *Aesthetica est scientia cognitionis sensitivae*. バウムガルテン『美学』(松尾大訳) 玉川大学出版部、1987、15ページ。
- 9) A. G. Baumgarten, *op. cit.*, §13. 下位認識能力については A. G. Baumgarten, *Metaphysica*, 1739, §520. にある次の文を参照。Unde FACULTAS obscure confuseque seu indistincte aliquid cognoscendi COGNOSCITIVA INFERIOR est. Ergo anima mea habet facultatem cognoscitivam inferiorem. また上掲『美学』日本語訳書の訳者松尾大による訳注、第1巻序言(1) 485-486 ページを参照のこと。

- 10) A. G. Baumgarten, *Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*, 1735, §116.
- 11) この前者はアリストテレスに言わせれば *Tà μετά τὰ φυσικά* すなわち形而上学 (Metaphysica) と呼ばれる学問である。
- 12) イアンブリコス (Iamblichus) の『ピュタゴラス主義について』の第3巻「数学的学問一般について」には、ピュタゴラス派の学問体系が解説されているという。すなわち高次の学問から並べていくと、哲学的問答法、数学的諸学科 (代数学、幾何学、音律学、天文学)、感覚されるものにかかわる学問 (自然学、倫理学、政治学) である。これは同上書第1巻「ピュタゴラス伝」の訳者佐藤義尚氏の解説による。イアンブリコス『ピュタゴラス伝』(佐藤義尚訳) 国文社、2000、280-281ページ参照。数学的諸学科 (*μάθηματικά ἐπιστήμῃ*) が哲学的問答法と自然学の中間に置かれている理由は、数学が対象とするのは非物体の真実在から派生した実在で、数学は影が本体に従うがごとくに真実在に寄り添うからである。なおこの数学的諸学科は周知のように自由学芸 (*artes liberales*) のうちの4科 (*quadrivium*) に当たるものである。
- 13) ドイツ観念論の哲学者ヘーゲルは、その美学講義 (1826) の冒頭において、人間精神の所産である芸術美のみを取り上げ、自然美は除外すると言明していることはよく知られているが、このヘーゲルの影響は甚大であって、以後、美学はほとんど芸術哲学となってしまった感がある。Cf. Georg Lasson (Hrsg.), Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Sämtliche Werke*, Bd. Xa: Vorlesungen über die Ästhetik, Erster Halbband, Einleitung und Erster Teil, 1. Abteilung: Die Idee und das Ideal (Der Philosophischen Bibliothek Bd. 164), Felix Meiner, 1931. S. 1.
- 14) Etienne Souriau, *Clefs pour l'esthétique*, 1970. P. 7.
- 15) Wolfhart Henckmann und Konrad Lotter (Hrsg.), *Lexikon der Ästhetik*, Beck, 1992. 日本語訳、W. ヘンクマン/K. ロッター編『美学のキーワード』後藤狷士・武藤三千夫・利光功・神林恒道・太田喬夫・岩城見一監訳、勁草書房、2001.
- 16) Michael Kelly (Editor in Chief), *Encyclopedia of Aesthetics*, Oxford Univ. Press, 4 Vols., 1998.
- 17) 佐々木健一『フランスを中心とする18世紀美学史の研究——ウァットからモーツァルトへ』岩波書店、1999.
- 18) 同上書、xii ページ。